

いま、伝えるべきこと 見つめ続けること

映画は 生きものの 記録である 土本典昭の仕事



企画・製作: 伏屋博雄

撮影: 加藤孝信

音響監督: 久保田幸雄

監督補: 今田哲史

インタビュー: 石坂健治

宣伝美術: 鈴木一誌

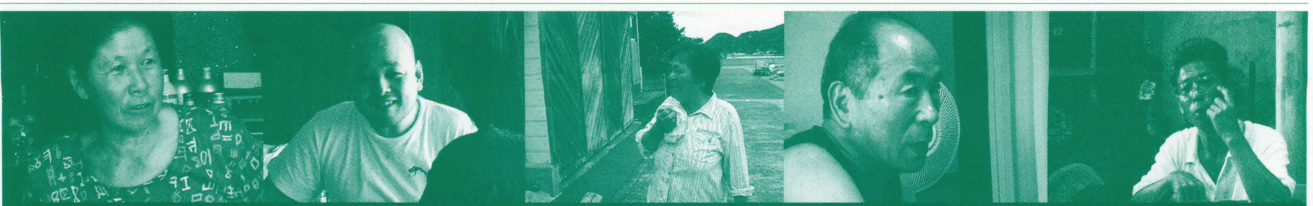
製作・配給: ビジュアルトラックス

www.tsuchimoto-eiga.com



監督: 藤原敏史

出演: 土本典昭



映画は生きものの記録である 土本典昭の仕事

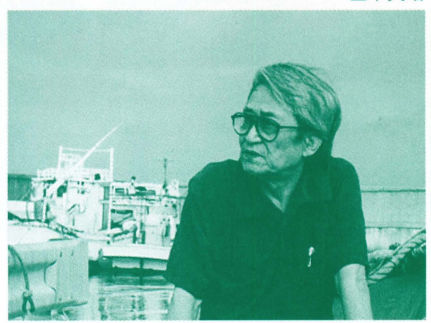
自然に対する人間の生き方の態度をね、大事にしようよ。
 映画の自由さがね、やっぱりその事を見逃すわけにはいかなかった。
 土本典昭

私達には土本さんがいれば、きっと大丈夫。私自身の小さな戦いの中にでさえ、土本典昭という一本の線が、自身の位置や方向を示すのです。だから私達は土本さんの様に、熱くなっても溶けないし悲しくっても凍らない……出来たてのビー玉みたいに透明な「目」で、記録する事と格闘し続けなければいけないんだ。

加藤 治代 (映画『チーズとうじ虫』監督)

土本典昭

生活の細部に歴史を発酵させた記録映画作家・土本典昭。
 いま、現代が押し流した歴史の前にたたずみ、改めて人間を問う。
 鈴木志郎康 (映像作家・詩人)



人が人とつながる メッセージ ひとりのドキュメンタリー作家が語りかける、わたしたちへの伝言

いま、わたしたちは土本典昭とともに旅に出る。日本が世界に誇るドキュメンタリー映画の巨匠、土本典昭。本作はその映画と、見守り続けてきた「水俣」への思いを余すことなく伝える。土本は語りかける。自宅で、編集機の前で、そして水俣で。初期作品『ある機関助手』や『ドキュメント 路上』への言及。『水俣 患者さんとその世界』、『不知火海』といった名シーン。久しぶりに水俣の人々と再会を果たす土本。わたしたちはこの旅で、伝え続けることの大切さを知る、ひとりの人間と出会うことになる。土本典昭の世界へ誘うのは、劇映画第1作『ぼくらはもう帰れない』がベルリン国際映画祭(2006年)で上映され、世界の注目を集めた俊英、藤原敏史。本作が初めての劇場公開作品となる。また、小川プロのプロデューサーとして知られ、河瀬直美『杣人物語』など多くのドキュメンタリーに携わった、伏屋博雄が企画・製作にあっている。

出演●土本典昭
 監督●藤原敏史
 企画・製作●伏屋博雄
 撮影●加藤孝信
 音響監督●久保田幸雄
 監督補●今田哲史
 インタビュー●石坂健治
 宣伝美術●鈴木一誌



おだやかで静かな水俣の海 この海にいまなお続く忘れられない歴史がある

海にたたずむ、土本典昭の姿。懐かしさ、寂しさ、悲しさ、嬉しさ、さまざまな思いがあふれる。2006年、水俣病は公式確認から50年を迎えた……。土本が初めて「水俣」を撮影したのは1965年のことだった。以来、17本にもおよぶ関連作品をつくりあげている。土本が見つめるのは負の歴史だけではない。海からの恩恵と、海のみながえりをも見つけ続けている。水俣に暮らし、海を糧に生きる人々。その姿を見守る、土本のまなざし。水俣と海の歴史はこれからも続いていく。

www.tsuchimoto-eiga.com

書籍●
『土本典昭の仕事』
 —ある記録映画作家の軌跡—
 土本典昭・石坂健治 共著
 現代書館より近刊

ドキュメンタリー映画の最前線メールマガジン
neoneo
 伏屋博雄 責任編集 / 月2回無料配信中
 登録ホームページ●
 homepage2.nifty.com/negri-project/neoneo/

水俣病についての詳しい情報は▶▶▶(財)水俣病センター相思社 www.soshisha.org

5月下旬より モーニングショー
 特別鑑賞券¥1400(税込)
 劇場窓口、プレイガイド、チケットぴあにて発売中
 (当日:一般¥1700、大学・高校¥1400の処)
『映画は生きものの記録である』サポーター募集中!!
 いっしょに映画を広めませんか? 詳細は、ホームページへ

ユーロスペース
 渋谷・文化村交差点左折
 ☎ 03-3461-0211
www.eurospace.co.jp